

三重大学人文学部外部評価総評

学校法人河合塾 教育研究部長 滝 紀子

2004年4月に国立大学の活性化のためのマネジメント改革として国立大学が法人化され、もうすぐ2年を経ようとしています。また、2007年度には志願者数に対する大学・短大の収容力は100%に達すると試算されており、いわゆる大学全入時代が到来します。一方、経済不況のなか、受験生の国公立大志向は強まっていますが、大学選びの二極化もすすんでいます。このように大学をめぐる環境が大きく変化している状況を踏まえ、三重大学人文学部について分析したいと思います。

まず、2005年度入試から見た入試難易度（前期日程）を競合大学と比較します。三重大学人文学部文化学科の大学入試センター試験のボーダー得点率は63.3%：2次試験の偏差値は50.0、社会科学科は65.0%：50.0です。競合大学については、岐阜大学地域科学部地域科学科は64.4%：55.0、静岡大学人文学部社会科学科は72.4%：52.5、言語文化学科は70.2%：55.0、経済学科は66.1%：47.5、愛知県立大学文学部英文学科は76.9%：57.5、日本文化学科は70.4%：55.0です。

次に、2003年度～2005年度の倍率（受験者÷合格者）で比較してみます。三重大学人文学部（前期日程）は2.7倍→2.3倍→1.8倍です。それに対して、岐阜大学地域科学部は2.8倍→3.8倍→3.3倍、静岡大学人文学部は2.0倍→2.2倍→1.9倍、愛知県立大学文学部は3.9倍→3.1倍→3.1倍です。

入試難易度と倍率からみますと、三重大学人文学部は競合大学のなかで一番低い位置づけにあることがわかります。また、倍率が2倍未満だと選抜試験としてどの程度適正に機能しているかどうか疑問が残ります。さらに、大学入試センター試験は、高校の教科書をきちんと勉強していれば7割は得点できると一般的に言われており、2005年度の5教科6科目の平均点（河合塾推定）は514点(800点満点)で得点率は64.3%でした。つまり、平均点をとれば三重大学人文学部の合格ボーダーライン上にあるということです。また、二次偏差値の50.0も国立大としては決して高いとはいえません。このように三重大学人文学部は入試レベルでは質・量ともに大変厳しい状況であることがうかがえます。

それでは、受験生は三重大学人文学部にどのようなイメージを持っているのでしょうか？そこで、河合塾の東海地区及び近畿地区のチューター（高校のホームクラス担任のようなもので進路指導を担当している）に聞いてみました。どういうイメージの大学ですかという質問に対して、「第一志望として考える大学ではない」「本気で名古屋大を狙っている学力層からは流れないと思う、受け皿になっていない」「とても遠く感じる、立地条件はかなり不利」「そもそも三重大の志望者が少ない（近畿地区）」「経済、法ならば静岡大のほうがイメージしやすい」といった厳しい意見が多かったです。

次に、三重大学に希望する改善点等がありますかと質問したところ、「アピールするものが何かわからない、イメージできない」「改善点という以前にそもそも印象が薄い。立地の不利を補える何か欲しい」「就職でどういう方面に強いのかなど、何か特徴的なことがあ

ると保護者にも勧めやすい」という意見が聞かれました。

意見を総括すると、大学の中身のアピールポイントが良くわからないので、国公立大志向が強まっているなか、立地が不利というマイナス要因はあるにせよ、それを覆して他県から志望する受験生が少ないということだと思います。

それでは、実際三重大学人文学部の教育成果に対する評価はどのようなものでしょうか。2004年度に三重大学が実施した「教育に対する学生の満足度調査報告書」を読みますと、三重大学人文学部の問題点と課題が浮き彫りになってきます。

「三重大学の教育全般について」の人文学部生の満足度は、7点満点中4点（どちらともいえない）付近に集中しています。また、「三重大学の教育を改善しようとする大学の姿勢」に対する満足度は、3.5 付近に集中していて不満の方向に回答しているといえます。「自分の所属する学部（学科等）のカリキュラム」に対する満足度は、学年別に 3.3～4.0 と広がっていますが、やはり不満の方向に回答しているといえます。

さらに、産業界からみて最近の若者に不足していると思われる項目を具体的に見ていきますと、「三重大学の授業はコミュニケーション力を高める授業である」に対する回答は 2.6～3.0、「モチベーションを高め学ぶ喜びを感じさせる授業である」に対する回答は 2.9～3.5、「考える力を養うことに役に立つ授業である」に対する回答は 3.3～3.7、「生きる力を養うことに役に立つ授業である」に対する回答は 2.9～3.3 と学年を通してあまりそう思わない付近に得点が集まっています。

国立大学法人の中期目標・中期計画の3つの大きな柱は、教育・研究・社会貢献ですが、やはり教育機関として、教育が大学の最も重要な使命だと思います。また、今日の社会状況の変化は著しく、あらゆる分野で従来の組織・枠組みの改革・転換が迫られているなか、我が国の基盤をなす高等教育の担い手である大学に対して、人材育成がこれまで以上に期待されています。

三重大学人文学部は、文化学科と社会科学科という構成で、幅広い学問分野の教授陣を擁しています。実は今産業界からも幅広い教養をしっかりと身に付けさせるリベラルアーツ型大学が注目されてきています。幅広い視野と教養、豊かな創造性を身につけ、目的意識と主体性をもって、日本社会及び国際社会に貢献することができる人材を育成することが求められているのです。

そのためには、やはりそのような人材育成をするための学部全体としての教育プログラムを構築すべきだと思います。人文学部ではオリエンテーションをしっかりとっている、全員がゼミの指導を受ける、卒論が必修など学生の個別指導に力を注いでいて好感が持てます。しかし、学部全体のカリキュラムとしての視点が弱いため、特徴がわかりづらいように思います。

三重大学人文学部にとって、「志願者数をいかに増やすか」が大きな課題であり、これまでの国立大学と違って、広報に力を入れられようとしていることは大変良いことだと思います。大学から積極的に発信していかないと、高校生、高校の先生、保護者にはなかなか

伝わらないです。しかし、広報するためにはその中身が大事です。指導体制、指導方針がしっかりしていて、面倒見が良く、卒業生の満足度が高い大学がこれから受験生にも評価されていくと思います。

将来構想の中で、三重大大学の教育目標として、「学生とともに考え、学生とともに解決をめざす教育を実現する（PBL：問題発見解決型学習）」とお聞きしました。理工系学部では取り組んでいる大学も多いのですが、文系学部ではほとんどありません。とても大事なことだと思いますので、是非具体的な教育プログラムでの実現を期待しています。

上記評価に対する学部としての見解

河合塾の滝先生には、特に人材育成という観点から、人文学部の抱える問題点を非常に明確に指摘していただきました。現在でも教育を疎かにしている訳では決してありませんし、少人数できめ細かい教育を行なっているのが人文学部の特徴であり、在学生もこの点に関しては高い評価をしています。しかし、その一方、学部や学科総体としての教育の目指すところがなかなかわかりにくいというご意見を、多くの方からいただいております。我々としては、三重大大学唯一の文系学部の特徴を最大限に活かしながら、外から見て分かりやすい、かつ存在をアピールできるような学部、学科の教育体制のありかたを検討し、必要な措置を施すことが急務と考えております。2006年度は、学部長のリーダーシップの下、改革の方向性を定めることになっています。